
待ち恋

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
待ち恋

【コード】
N4688K

【作者名】
imaiwa

【あらすじ】
賢一は10年ぶりに最愛の人紗枝と再会した。

(前書き)

妄想350%。

荒すぎたので、投稿してからかなり推敲しました……

「……………」

「賢一……………」

紗枝は賢一に気づくと、目を見張って口を両手で包んだ。

8年ぶりの再会……………」

賢一はしばし言葉が出てこなかった。

俯いたまま、ショルダーバッグを地面に置く。

夕日が山の端に沈もうとしていた。

何て切り出そう……………」

賢一はしばらく黙ったまま過去を振り返り、最初に放つ言葉を捜し求めた

賢一はこの農村で一生を終えなくなかった。

東京で働きたい……………」

その思いを捨てきれなかった賢一は、高校を卒業してすぐに東京に出稼ぎに行った。

最愛の彼女紗枝を置いて……………」

あの晩……………」賢一は紗枝の実家に赴いて、玄関先に呼び出した。

五年したらお前を迎えに帰ってくる、だからそれまで待っていて欲しい

そう告げた後、賢一は紗枝の泣き顔を思い浮かべた。

しかし、紗枝は賢一の背中にほっそりとした、白い手を置き体をもたせかけ耳元で囁いた。

その言葉は今でも賢一の耳朶の奥に残されている。

『いつまでも待っているから……………」』

そうやって送り出されてから8年の月日が経った。

あの頃二人はまだ成人にも達していなかった。

そして、無知だった。

五年という月日の重さを……

世間の荒波の厳しさを……

人の心が移ろうものだといいことを理解していなかった。

若さがゆえに、順風満帆に都会で仕事について、五年後何も変わらざ二人は再会を果たす。

そう頑なに信じていた。

最初の一年間は、紗枝から毎日のように、メールでやり取りをし携帯で話もした。

しかし、2年目を過ぎると、その唯一の交信手段が途絶えた。

賢一は東京に出てきた一年目

建築関係の会社に派遣の営業マンとして働いていた。しかし、半年間そこで懸命に働くが、一向にノルマを達する事が出来なかった。それが理由であえなく、派遣の更新をされなまま首を切られた。その後、点々とアルバイトをしながら職を探すが不況で仕事はなかった。月3万のポロアパートに住む賢一は、窮迫した金銭事情を考えて携帯を解約した。苦渋の判断だったが、その時は紗枝の事を考える余裕さえなかった。生きるのに必死だったのだ。

だが　その後、意外にもすぐに仕事は見つかった。

小さな会社に就職が決まったのだ。家族で経営しているような零細企業だったが、資本金は潤沢で取引相手も固定されていて、潰れるような憂き目に会う事はなさそうだった。

そして　そこで事務をやっている社長の娘に見初められた。

付き合っただけで欲しいと切り出された時、紗枝の事を話してきっぱり断ろうと考えていた。しかし、それをしてしまえば、この会社を出て行く他はない。それだけはしたくなかった。やっと正社員として仕事に就いたのだ。しかし、最初は紗枝の事を考え、微妙に距離を保ちながら付き合いを続けた。が、賢一も若い男子、いつしか紗枝の事を記憶の底にしまいこみ、明るい彼女のペースに嵌り込み肉欲に溺れていった。若気の至りだった。そうしているうちに、紗枝と連絡をとることさえもなくなっていった。

あれから4年したのち、彼女とうまくいかなくなり別れてしまった……

賢一は結局、会社を辞めた。その後、車会社の工場で働きながら東京で生活を続けた。生きていくにやっとの生活の中、隅に押し込んだ紗枝の記憶が日に日に強く思い出されるようになった。だが、どんな顔で連絡をとればいいのか分からなかった。

そして もう、愛想つかして自分の事を見捨てているだろうと思っていた。

故郷を出てから7年、連絡をしなくなって4年が過ぎていた。しかし、今年の春、悩み続けたが結局 紗枝の実家に携帯から連絡を入れた。もしかしたら、沙耶は既に近隣にでも嫁いでいても可笑しくはない。それでも玉碎覚悟で携帯の番号を打ち始めた。砕けても自分の責任、全てを受け入れるつもりだった。電話口にでたのは 紗枝だった。以前と変わらぬ柔らかい声が耳元に届く。責められても仕方なかった。冷淡にあしらわれても、別れを告げられても

不思議ではない。だが、紗枝は言葉すくなく賢一の現状を確かめると、帰ってきて欲しいと言ったのだ。

「無事に帰ってきて良かった……おかえりなさい」

紗枝は笑顔を浮べ淡々と言った。

彼女の顔たちは微妙に年を刻んでいたが、昔の面影は充分に残っていた。

気後れしながらも彼女に誘われるまま、彼女のマンションに赴いた。

実家から離れた場所にある工場の事務として、働いているため、ここに住んでいると彼女はいった。しかし、距離的には実家から充分通える気はしたが、賢一は深くは聞かなかつた。賢一はうまく女性の影を隠して、向こうでの生活や連絡ができなかつた訳を繕いながら話した。紗枝は納得したようには見えなかつたが、特に疑いを持つようでもなかつた。7年の月日はごまかしきれるものではない。しかし、彼女は賢一のこれまでの苦労を前向きに肯定するような発言を繰り返した。

賢一はあまりにうまくいきすぎて、夢心地だったが、彼女の笑顔をみているうちに懐疑心も薄れいつしか、元の鞘に自然と納まっていく自分を感じていた。それからすぐに、彼女の斡旋で、彼女の働く工場で働くことになった。賢一は幸せだった。8年もの間、放逸な生活を向こうでしたにもかかわらず、出稼ぎに出る前より幸福な毎日を送っている。朝、紗枝と一緒に朝食をとり、会社に一緒に出勤、仕事が終われば夕食の準備を紗枝がしてくれる。夜はもちろん熱い甘美な一時が待っている。

その日も、ベッドの上で賢一の腕枕の上に頭を置いて、彼女は

つもと変わらない笑みを零した。賢一は彼女の右手首を掴むと自分の顔近くに持っていった。手を柔らかく引つ張り腕に舌を這わせていく。だが、ふと賢一は彼女の上腕部の裏側を見て違和感を感じた。

あれ……ここにたしか……

昔、紗枝と一緒に山へ出かけたとき、紗枝は小岩に蹴躓いた。その時、バランスを崩して、尖った木の枝で上腕部の後ろに深い傷を追った。何年しても黒い染みのような傷跡は消えることはなかったはずだった。しかし、今みるとそれはどこにも残っていない。

「紗枝、以前怪我して、ここに傷跡あったよな？」

「……………」

紗枝は黙ったまま、答えようとしなない。

「おかしいなあ……………」

尚も賢一は腕を隈なくみていた。

「あるわけないです、だって、私、紗枝姉さんじゃないもの……………」
不意に紗枝が手を払って寝たまま向き直り賢一に言った。

「え、どういうことだ？ 今、紗枝姉さんって……………」

「私は……………紗枝姉さんの双子の妹美希です」

「ええ、紗枝が双子なんて聞いてないぞ！」

賢一は動揺して、体を起こした。

美希はその後、目を固く閉じたが、

観念したように目を伏せて静かに語り始めた

紗枝、つまり美希の父親は妻が病院で双子を産んですぐに、他の女と浮気が発覚し別れたという事。

そして、別れる時、美希は物心つく前に母親に引き取られた事。

姉妹はその後一切会う事を許されなかったという。だが、3年前紗枝は重い病気にかかり死んでしまっていた。

それを境に父親は孤独のあまり、美希のマンションにやってきたという。美希はその時、母と死に別れ一人で暮らしていた。父親は自分の家で一緒に住むことを美希に涙ながらに懇願した。都合がいいことはわかっていたが、父親は縋りつくように頼んだ。老身の父親を見ていると、美希はなんだか哀れに思えてそれを了承して一緒に暮らすようになったのだ。

「私は母親に姉の家の場所聞かされてたし、母の目を盗んで姉とこっそり会ってたわ。でも母はそれを知っていたみたい。私たちを引き離れた事に後ろめたさを感じてたのかもしれない。だから、それとなく姉と同じ高校を受験した事にも何も言ってこなかった。でも同じ高校に行つたのは姉がいるからだけじゃなかった」

「え……」

「私たちは双子だけど、顔が似てきたのは二十歳過ぎてから。だから、私たちは姉妹だと周りに知られはしなかった。そのせいかあなたは私が姉の妹だと気づく事はなかった。あなたはきさくに私に話しかけてきてくれた。いつも包み込むような優しい瞳で接してくれた。中学生だった私は気がつけばあなたのことで頭がいっぱいでした。……けど、姉と付き合ってた事もしっていました。だから、一旦は諦めていました……」

何も言えずに賢一が固まっている横で、美希は淡々と静かな口調で続けた。

「あなたがここを出て行くとき、姉との一部始終をこっそり盗み聞きしていました、そして、あなたがここを出ていくことを知って三日三晩泣きはらしました。だけど、いくら涙を流しても、涙が涸れきるまで泣いてもあなたを忘れることができなかった。そして月日は過ぎて行った……姉は死ぬ間際には既に別の男性と付き合っていました。しかし、私は姉のようにあなたを忘れる事はできなかった……今、わがまま言って一人暮らししてるんですけど、会社から帰ると、毎日父の家に寄っています。あの日も私は父の家に帰っていました。そして、運良く、あなたから電話を受け取ることができた。

すぐにあなただと分かりました。あなたは沙耶と呟きました。私は動揺しました。けど咄嗟に成行きで……姉になりすましてしまいました。つい魔が差して……だけど、それは失敗ではなかった。あなたとこうして毎日幸福な生活を送れたんですから……でも、幸福な反面、嘘をついたまま過ごす事に息が詰まりそうになっていきました。でも、臆病な私はとうとう言えずじまいで……」

そこまで言い切ると美希は涙をながしながら枕に顔を埋めてしまった。嗚咽をあげながら、ひっそりと声を殺して泣いていた。

「そうか……紗枝は死んだのか……」

賢一は泣き止まぬ美希を横目にベッドから這い出た。脇にあった椅子に座り闇が覆う外の景色を眺めていた。空に競い合うように星々が瞬いている。

「美希……さん、俺は……」

突然、空からベッドに視線を移して賢一は呟いた。ベッドに身を投げ出し、うつ伏せになって、顔を美希の頭の近くに寄せる。

「まだ、全てを受け入れる事はできないし、その資格さえもってはない……けど、こんな中途半端な俺でよければ、もう少し待ってくれるかい……？」

「え……」

紗枝は思わず泣き止み、賢一の顔をじっと見つめた。赤く腫れた目は賢一をしっかりと捉えて離さなかった。

数カ月後　落ち着いた賢一は紗枝ではなく、美希にプロポーズの言葉をなげかけた。

「長い間、待たせてすまなかった。こんな俺でよければ結婚してほしい」

「はい、喜んで……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4688k/>

待ち恋

2010年10月8日15時20分発行